

[会員からの寄稿]

韓国の野生イノシシでのアフリカ豚熱対策あれこれ ～ネットで読み解く韓国情報～

鷲谷 敏一

(ハングル学習者)

Saginoya, T.(2024): ASF information of the wild boar in Korean internet news

All about SWINE 65, 25-30

韓国釜山広域市の山中で、アフリカ豚熱 (ASF) に罹患した野生イノシシが相次いで発見されており、日本各地へ向かうフェリーターミナルも近いことから、動物検疫所をはじめ各県での防疫対策が強化されている。

本年度の豚病研究会研究集会（令和6年5月14日）での農林水産省動物検疫所管理指導課長栗栖輝光氏の講演「アフターコロナにおける水際検疫の実態」で、フェリーターミナルにおいて韓国からのサイクリング旅行者のタイヤ消毒をおこなったり、待合室で携行しているサンドイッチなどを捨てるよう促したり、ゴルフ客のゴルフシューズの消毒を依頼するなどの検疫官の姿が紹介された。ウイルスの侵入防止になみなみならぬ努力をされていることに敬意を表したい。

さて、釜山での野生イノシシへのASFウイルス拡散については農水省ホームページ等でもリアルタイムな情報がアップされており（図1）、読者もご承知のことと思う。本稿では、インターネット上の新聞記事などで取り上げられたものをピックアップし、公式情報だけではみえないいろいろな情報を得たので紹介したい。現地での生産

者をはじめとした関係各者の苦労の実態が伝われば幸いである。

韓国でも、飼育豚のASF対策は日本の農林水産省にあたる「農林畜産食品部」が担当し、野生イノシシの疾病管理は環境省にあたる「環境部」が主管となっている。環境部の法令「野生生物保護および管理に関する法律施行規則」では、野生イノシシを食べることが禁止されている。一方で銃器による狩猟が盛んである。イノシシ対策として防護柵・フェンスを、農場はもちろんのこと各地で道路や田畑に張り巡らす方策をとっている。

なお、イノシシの発見日付は、狩猟を行った日、当局が申告を受けた日、確定診断をした日など、記事によってはいろいろなのでご注意願いたい。

1. 2023年1月31日 NEWSIS (뉴스=ニュース) という韓国のネット新聞) 記事「釜山豚熱、防疫当局の初期対応に問題があった」

釜山広域市では、2023年12月に金井区（クムジョング）で1例目が発見されたあと、沙上区（ササング）で年明けの2024年1月18日に2例

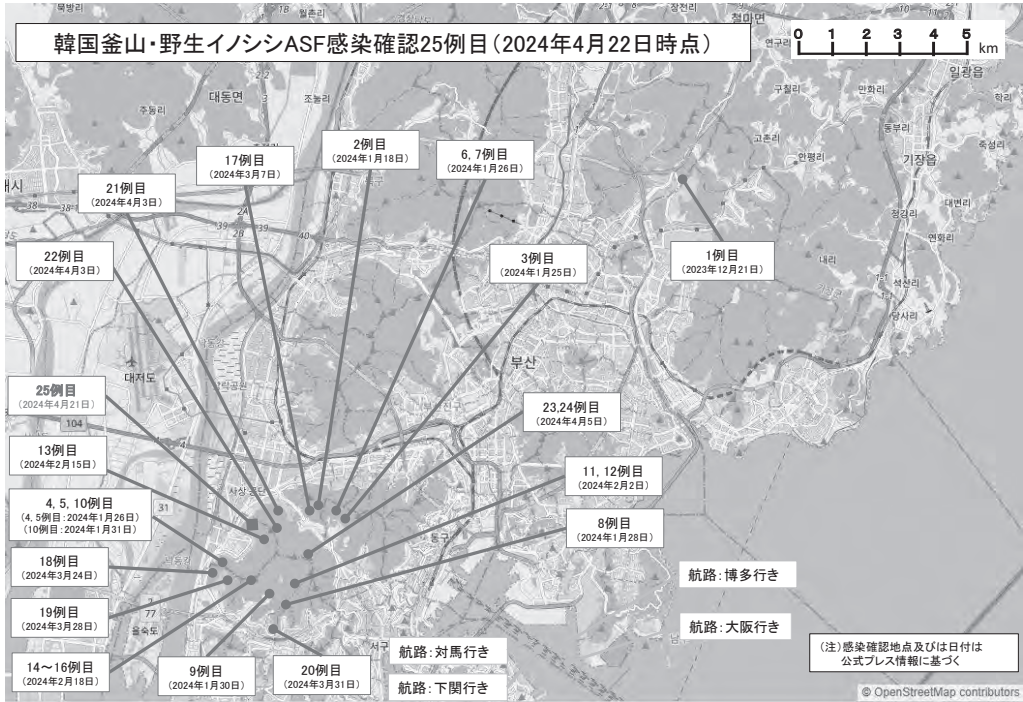


図1 釜山広域市における野生イノシシ ASF 感染確認地図 (農水省)



図2 2024年1月18日時点での釜山広域市の2例目野生イノシシ ASF 感染確認 (☆印)

目の陽性イノシシが発見された（図2）。その後次々と発見され、この記事の時点で釜山広域市でのASF陽性野生イノシシは9頭に増加しており、ここまでの経過と防疫当局の対応の問題点を、NEWSISがまとめている。

釜山広域市で最初に見つかった野生イノシシの陽性例は、金井区会東洞（クムジョング・フェンドン）で2013年12月13日に捕獲されたものであった。捕獲した猟師のA氏は、12月18日に、同じ車両・猟犬・道具を用いて、釜山広域市の沙上区乗鶴山（ササング・スンハクサン）でもイノシシ猟をおこなったことが判明している。

問題点① 金井区のイノシシがASF陽性であるということが、国立野生動物疾病管理院から、釜山市に伝達されたのが、12月21日であった。

問題点② 国立野生動物疾病管理院は、A氏からの野生イノシシを捕獲したとの申告をうけて、12月18日に釜山へ赴き、A氏の車両と猟犬などを調べた。すると車両からASFウイルスのDNAが検出されたので、A氏に猟をしないように指示したとのことである。しかし、A氏はすでに18日にはイノシシ猟をおこなっており、乗鶴山の調査を徹底すべきであったとNEWSISは指摘している。

問題点③ 同疾病管理院の見解で、18日にA氏が捕えたイノシシは、ASF陰性であったため、A氏が拡散源になった可能性は低いとの見解を示すなどの外れである。

問題点④ 最初に発生した、金井区の陽性イノシシ発見地点を中心に半径10km以内を狩猟禁止とすべきであるところ、釜山市側だけを禁猟として、隣接する慶尚南道の梁山市側には規制がない。

2. 2024年2月15日 PIGPEOPLE (돼지와사람 = テジワサラム(豚と人) という養豚専門ネットニュース) 「政府のイノシシ捕獲頭数信頼揺るがす・・・機張郡で、捕獲イノシシ重複申告摘発」

釜山広域市機張郡（キジャングン）で、同じイノシシで、褒賞金を二重取りした疑いで、郡に所属しているB氏を警察に告発した。釜山地域の放送局が伝えたスクープを後追いした記事であるが、郡所属の有害鳥獣捕獲員のB氏が、2023年7月から3か月で65頭を捕獲したと申告し、1頭あたり30,000ウォン（日本円で約3,000円）の捕獲褒賞金を得たとのこと。実際は40頭で25頭は重複申告していたという疑い。機張郡では、イノシシは現地埋却で写真を提出すれば褒賞金が受け取れるという抜け道があった。他の自治体の場合イノシシの焼却証明書が原則とのこと。

政府は、2022年に全国のイノシシ密度を1平方キロメートルあたり0.7頭以下に減らすという目標をたて、このとき褒賞金も30,000ウォンに引き上げた。

これにより、2021年6万9,429頭、2022年7万4,627頭、2023年7万2,027頭が捕獲され、褒賞金により捕獲数が増えたと分析している。しかし、不正によりこれらの数値の信ぴょう性が問われるので、各自治体は早急に点検すべき、とまとめている。

3. 2024年1月25日 PIGPEOPLE 「果樹園でも使わないイノシシ忌避剤、養豚農場はなぜ使う？」

ASFの農場での発生が続く中、防疫当局は徹底した防疫対策をおこなうよう強調している。そ



図3 養豚場の外柵にぶらさげられたイノシシ忌避剤

んななか、養豚場のフェンスにイノシシ忌避剤なるものをぶら下げたり（図3）、自治体が農場周辺に忌避剤を散布する例が出てきている。忌避剤は、野生動物が嫌がるいやなおいを出す成分が入っている（注：薬品名や商品名の紹介はない）。2019年の野生イノシシでのASF発生により、養豚場で常時使用する品目になった。一方で、この効果に疑問をもつ農家もあり、「果樹園でも使わないのになぜ養豚場で使わせるのか」と不満もっている。

実際果樹農家への取材では、イノシシを寄せ付けない効果はないという。代わりに電気柵を使用しているとのこと。実際にイノシシをはじめとした野生動物による農作物の被害は2014年から2022年までで、1000億ウォン（日本円で約100億円）に達している。政府が強力に推奨している忌避剤があるのになぜ？ PIGPEOPLEが、忌避剤メーカーに試験結果を問い合わせたが、回答はない。YouTubeで映像がすぐ見つかるが、相当数が効果無しというテロップとともに流れている。

専門機関での研究結果を調べたところ、2014年にソウル大学による産学協同研究「イノシシ棲息地の利用特性および被害防止技術開発」の報告書で、関連した内容を確認することができた。あぜ道に忌避剤を散布して、イノシシ被害をなくすことはできなかった。また飼育イノシシでの実験でも最初は嫌がる傾向があったが、徐々に近づき最後はエサの場所に到達してしまったという。獣医学の専門家によると、すでに養豚農場には柵があり、出入口を閉めておくことで、イノシシが農場に入ることはほとんどない。忌避剤は経費の無駄遣いで、早くやめるべきだとの意見。政府に忌避剤についての見解を問いたい。生石灰や消毒ポイントの整備に注力すべき。とまとめている。

4. 2024年6月4日キョンアン日報 (경안일보)

『ASFをくい止める』・・・慶尚北道，ドローンでイノシシ忌避剤防疫

道は、5月31日から江原道隣接地域と野生イノシシでASFが検出された市・郡の養豚場にドローンを活用しイノシシ忌避剤の散布を始めた。これに先立って道は、4月にも災害管理基金を投入して、固定型イノシシ忌避剤3,060包（8,800万ウォン）（注：日本円で約880万円）を支援した。

キム道農畜産流通局長は、「今回のドローンを活用した防疫活動が円滑に進むよう、積極的に協力していただいた家畜衛生防疫支援本部（慶北道本部）と韓豚協会（慶北道協議会）に深謝します。」とし、養豚農家には「基本に忠実な積極的な防疫規則遵守」をお願いした。

5. 2024年6月6日キョンアン日報社説「慶北道と江原隣接地域防疫『ASF イノシシ忌避剤』だけでいいのか」

6月4日の記事をうけた社説。ASFの発生状況や、野生イノシシの状況を説明した後、キム流通局長が「基本に忠実な積極的な防疫規則遵守」をお願いしたいと語ったことに対し、「基本に忠実とはいったいなんのことを言っているのか」と反駁する内容である。

基本は、豚は生き物であるというところから出発しなければならない。豚は資本を創出する道具でも手段でもない。忌避剤も殺処分も基本を逸脱している。

豚という生命へのケアは免疫力を高めることである。1つの檻に身動きできないほど詰め込んで、促成で育てるために豚の食べないようなものを与え、抗生剤をむやみに与えるのであれば、豚は殺

処分の対象になるだけである。このようなことが続けば（ASFは）人獣共通の病気に進化してしまうかもしれない。このまま殺処分をつづけるのか？豚それ自体の免疫力を高める方法を関係当局は具現することを望む。

（注：どうも、この新聞社の主筆には、劣悪な環境で抗生物質漬けの養豚のイメージがあるようで、そこから豚を解放し免疫力を高めることが、基本に忠実な管理であり、ASFを退散させることができると考えていることが読み取れる。一般人と養豚現場のギャップはここにもあるようだ。）

6. 2024年3月6日 PIGPEOPLE 「撤去？維持？政府イノシシ遮断柵の運命を決める研究を進める」

環境部は3月5日にホームページで「ASF遮断柵の効果分析および管理改善方法」という題目の

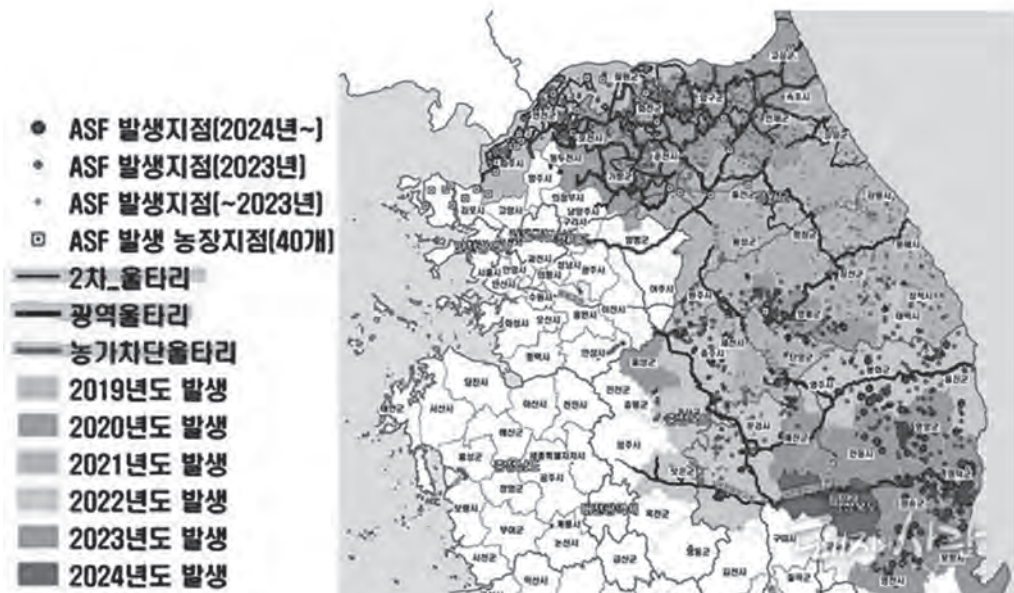


図4 野生イノシシ防護柵地図（地図右側の網掛け部分の太線が設置された柵を示す）

委託研究への募集を公告した。2019年10月の野生イノシシでの初発により、同年11月から2022年5月まで、京畿道、江原道、忠清北道、慶尚北道などに「野生イノシシ拡散防止柵を設置し続けている。環境部が発表した柵の長さは、1,831 kmとなりソウル・釜山間の4倍以上、2024年の現在まで補修しながら維持している（図4）。こうしたなか、忠清北道、慶尚北道の最南端境界でもASF感染イノシシが発見されることが、今や日常的になっている。拳句の果てに釜山でも発見され、最近主要マスコミでは「柵の使命は終わった」「無用の長物」という指摘とともに、カモシカなどの野生動物の移動を制限するなど生態系の混乱の要因となっていると強く批判されている。さらに、柵と柵の間に隙間があるなど管理失宜や、住民からの「移動に不便・景観破壊」などの苦情もあり、次第に柵の撤去の主張が力を得ている状況。

今般の環境部の委託研究では、ASF遮断柵の国外政策と効果分析事例収集、柵設置・維持管理苦情状況調査、イノシシ移動遮断とASF拡散遅延効果測定等により、柵事業の費用対効果を区間

別に評価し開放可能区間を検討することとしている。この委託研究費は暫定9,500万ウォン（注：日本円で約950万円）、期間は契約後12か月以内となっている。

おわりに

本稿をまとめている2024年8月初旬では、韓国の養豚農場でのASF発生は、2019年9月の京畿道坡州（パジュ）市での初発生以来、慶尚北道醴泉（イェチョン）郡の44例目となっている。当初は、北朝鮮との境界に近い京畿道や江原道での発生が多かったものが、陽性野生イノシシの発見例が南下するのにもなって、慶尚北道の農場でも発生するようになってしまった。韓国政府は野生イノシシでの感染防止と、農場での発生阻止に向けて、防疫体制の点検や立て直しをはかっている。どのような形で終息に向かうのか想像もつかない。

我々養豚関係者としては、日本へのASFウイルスの侵入防止と、実効性ある農場の防疫体制の確立のためのあらゆる努力を惜しんではならないと強く願っている。